

家庭教育支援協会

会報誌 15 号

共鳴する「弱さ」のちから

家庭教育支援協会理事長
二川 早苗

ファミレスの猫型配膳ロボットが、好きだ。通路が狭いとき、どうするのだろう。テーブルの上にちゃんと置いてくれるの？運んでいるものが途中でなくなったらどうするの？厨房までどうやって帰るの？初めてそれを見た時、興味津々だった。

あいにく私のテーブルに来たのは人間だったが、諦めきれずに人間に聞いた。「どうすればロボットに運んでもらえますか？」そうすると、「厨房からの距離が近いときは、人間が運びます」との答えが返ってきた。混んでいる店内では席が変わるわけにもいかず、おとなしく座り続けたが、相変わらず目はロボットを追ってしまう。

ロボットが急に動かなくなった。配膳ロボットは、通路を塞ぎ、邪魔者になってしまった。通れない通路で、客は遠回りして、ドリンクバーに行ったり、迂回して席に着いたりしている。文句を言う人はいない。

しばらくして、漸く、ロボットが帰って来ないことに気付いた店員さんが、ロボットを連れ戻しに来た。AI スイッチは頭にあるらしく、店員さんが、ポンポンと頭を何度か押している。猫型ロボットは目をきょときょとさせるだけの可愛い置物のまま。店員さんは、慣れた手つきで動かなくなった猫型ロボットの手を引っ張ったり、後ろから押したりして、厨房に連れて帰った。人出不足解消の切り札は、あえなく退場した。

自分では何もできないロボットは、ファミレスで「弱さ」を売り物にしているわけではない。とはいえ、「弱さ」は、目の前の放っておけない存在として立ち尽くしているのだ。

「脆弱(vulnerable)」な存在として生まれ来る我々人間は、他者との関係を切り結びながら漸く生き延びることができる。ロシアの発達心理学者レフ・ヴィゴツキーは「他者からのアシストの下で、はじめてできる水準」のことを「発達の最近接領域(Zone of Proximal Development / ZPD)」と呼んだ。彼が、提唱した ZPD は、子どもの発達プロセスについて言及しており、一人では何もできないが、誰かの助けがあればできる領域のことを指す。

まさに、件の猫型ロボットのそれだ。この考え方は、子育てや介護の在り方にもヒントになる。どちらもほどほどのケアが、自律を促すのだ。

私は、将来、頼んだことをすぐにはできない、生産効率のあまりよくない介護ロボットに世話をしてほしいと思っている。「あれをあーして」と代名詞だけで喋る私と、人に手伝ってもらわないと何もできないロボット。「弱さ」と「弱さ」が共鳴しあいながら応答するのだ。弱さゆえにコミュニケーションの応答は続くことになるだろう。最後はこの通じなさにあきれて笑いたい。子育ても介護も、ちょっと足りないのが、伸びしろがあってちょうどいい。

私は本気でそう思っている。



昨年 6月18日(土)に行われた令和4年度第1回研修会の発表内容をご報告申し上げます。

「児童虐待とその影響」

ペンネーム: ゆっきい

「児童虐待」と聞くと、ニュースで取り上げられる様な、親が子どもに酷い体罰を与えたり、ご飯を食べさせずに放置したりといったことを想像する人が多いと思いますが、児童虐待はそれだけではありません。

児童虐待の定義

児童虐待は以下のように4種類に分類されている。

- 身体的虐待: 殴る、蹴る、叩く、投げ落とす、激しく揺さぶる、やけどを負わせる、溺れさせる、首を絞める、縄などにより一室に拘束する など
- 性的虐待: 子どもへの性的行為、性的行為を見せる、性器を触る又は触らせる、ポルノグラフィの被写体にする など
- ネグレクト: 家に閉じ込める、食事を与えない、ひどく不潔にする、自動車の中に放置する、重い病気になっても病院に連れて行かない など
- 心理的虐待: 言葉による脅し、無視、きょうだい間での差別的扱い、子どもの目の前で家族に対して暴力をふるう(ドメスティック・バイオレンス:DV)、きょうだいに虐待行為を行う など

厚生労働省ホームページ「児童虐待の定義」より

上記、4種類の虐待の分類の中で、最も多いのが「心理的虐待」です。令和3年度は全体の60%を占めています。子どもの面前での夫婦喧嘩もこれに当たるのをご存知でしょうか。たかが夫婦喧嘩と思う方が多いかもしれませんが、子どもへの影響は計り知れません。成長過程にある子どもの自己肯定感の欠如に繋がる可能性が大きいと言われていています。躰と称し叩く・怒鳴り声をあげるなど、辛い体験をした子は、脳に様々な影響が出ると最近の研究で明らかになっています。

誰でも、イライラすることがあります。その様な時は、一息付きにその場を離れてみましょう。外の空気を吸いにベランダに出るのも良いでしょう。自分自身のクールダウンの方法を見つけておくとも良いですね。

最後にお知らせです。身近な所で「もしかすると虐待」と気になる子どもが居たら、警察に連絡するか、ダイヤル「189(イチハヤク)」に電話しましょう。子どもの大切な将来を守ることが出来るかもしれません。

活動報告② 日本家庭教育学会 第 37 回大会 2022 年 8 月 20 日

昨年 8 月 20 日(土)に貞静学園短期大学にて行われた日本家庭教育学会第 37 回大会をお写真でご報告申し上げます。



受付:城条さん、二川理事長、沖さん



座長:二川理事長



ご挨拶:日本家庭教育学会 奥副会長



ご講演:東京医科歯科大学 藤原武男先生

活動報告③ 家庭教育支援協会令和4年度第2回研修会 2023 年 2 月 19 日

今年 2 月 19 日(日)に行われた令和 4 年度第 2 回研修会の発表内容をご報告申し上げます。

『不登校』から見てきた社会と家庭教育

家庭教育師・家庭教育アドバイザー 石井 登



平成に入り、学校教育の効率化の下に、大学を含め、競争による『目に見える教育効果(効果の数値化)』が求められるようになりました。その結果、学校間の序列化が進み、校内生徒の多様性もとぼしくなってきました。近年、不登校や学校への行き辛さを感じる中学生の増加や中堅以下高校の生徒の学習意欲の低下など、その影響を懸念する声を身近に聴くことも増えてきました。

クラスで孤立感を深め、とにかく教室に入れようとする学校の対応に『ついに学校には居場所が無くなった』と感じるようになった A さんの不登校問題も、一部の生徒による“いじめ行為”が原因で、加害者本人とその親に嚴重注意をした上で謝罪させることで解決とされた。彼女の主張する「クラスの問題としてみんなで話し合う」ことも言下に否定され、「あとは君が登校するだけだ」と言う。この時、「表面上は収まっても本質的な解決にはならない」と疑問を持ったという。

不登校問題は『登校させる』ことが『解決』ではない。学校が『楽しく元気になれる居場所』となるように、生徒・保護者を含めて、話し合いをし続けることが重要なのではないか。親の過大な学歴信仰や学校の行き過ぎた教育効果競争が、まわりまわって、思春期の子供たちの主体性の育成を阻害し、子どもの居場所を奪うことになってはいないだろうか。学校の教育姿勢が『生徒が学校に合わせる』から『学校が生徒に合わせる』方向に変化する必要があると実感しています。

活動報告④ 家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会 2023年2月25日

今年2月25日(土)に日本家庭教育学会主催『家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会』が開催されました。理事長の二川早苗氏が講演いたしましたので、報告いたします。

ケアの倫理は家庭教育に何を言えるのか—不確実な時代を生き延びるために—

日本家庭教育学会副会長／家庭教育支援協会理事長 二川 早苗

ケアの倫理は、20世紀後半、アメリカで発展した学説です。

講演は、『ハインツのジレンマ』というエピソードから始まりました。重病の妻のために高額な薬を手に入れたいが、お金が足りず薬局の店主に頼んでも断られ、思いつめられたハインツが薬局に盗みに押し入ったお話です。ハインツはそうすべきだったのか？その理由は？

男性の答えは、財産と生命を比較すれば、生命を取るべきだと考えました。それに対し、女性の答えは、薬局とのつながりを何とか維持しつつ、どうにかしてその解決方法を見出そうとしました。

この世界は、正義や公正、規則や規範もあるけれど、最終的には人と人のつながりで成り立っている世界である。ケアの倫理は、この人と人の関係性から生まれた研究のように思います。

ケアの倫理の基本は、正義や公正に対し、気遣いやケアすることで、他者の成長をたすける事と考えます。

アメリカの教育哲学者ネル・ノディングスによると、ケアが成立するために必要な条件とは、①動機の転移②行為③ケアの認識です。

例えば、困っている人がいるとします。その人を助けたいと思う事(①)→思わず体が動く(②)

→助けられた人は、ケアされていることを認識している(③)となります。そして、ケアは専心没頭(心を一心にして心を相手に砕くこと)することによって、完結します。

ケアは、自己肯定感の回復をもたらします。個人的な小さな願いを積み重ねることによって、達成感が得られ、自己肯定感につながります。ですから、そのニーズをキャッチする能力がケアには必要です。ケアは、その人の尊厳に直結していると言えます。

しかし、ここで気をつけなければならないのが、助けすぎてしまう事です。助けすぎると、その人の自立を奪ってしまい、優しさから先回りしてしまい、任せる事が出来ない。これは、その人を信頼していないということになります。また、このケアは、相手にとっていいケアになるから、喜ぶはずだ、喜ぶべきだと、相手への支配になりかねない。ケアする側は、独りよがりにならず、ニーズのある人がケアの主体で、主張できる環境も大切であると考えます。

最後に、ケアの考え方は、家庭の中でも、それ以外でも、またどの世代にも活かせるのではないのでしょうか。信頼関係の希薄な現代こそ、必要とされているものだと思います。

(報告 攝待逸子)

<編集後記>

今回も担当させていただくことに感謝申し上げます。私事ですが、末っ子の娘を含めて子どもたち全員が義務教育を終えました。

これを機会に新しいボランティアを始めようと考えております。応募予定のボランティアは募集人数20名で、申込多数の場合は抽選とのことですが、母も楽しみに応援してくれていて、生涯学習や総合教育推進に繋がることも期待して是非やりたいと考えております。(尾形有三)